TADOKU JUNIOR　自然のふしぎ神話　★★★☆☆ ふつう　381語

The Red-Headed Woodpecker

アカガシラキツツキ

Flora J. Cooke（1895年の本）　原文そのまま　朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　けちなおばあさんのところに、おなかをすかせた男の人がおかしをもらいに来ます。おばあさんは大きなおかしをあげたくなくて……。



There was an old woman who lived on a hill. You never heard of any one smaller or neater than she was. She always wore a black dress and a large white apron with big bows behind.

On her head was the queerest little red bonnet that you ever saw.

It is a sad thing to tell, but this woman had grown very selfish as the years went by.

People said this was because she lived alone and thought of nobody but herself.

One morning as she was baking cakes, a tired, hungry man came to her door.

“My good woman,” said he, “will you give me one of your cakes? I am very hungry. I have no money to pay for it, but whatever you first wish for you shall have.”

The old woman looked at her cakes and thought that they were too large to give away. She broke off a small bit of dough and put it into the oven to bake.

When it was done she thought this one was too nice and brown for a beggar.

She baked a smaller one and then a smaller one, but each one was as nice and brown as the first.

At last she took a piece of dough only as big as the head of a pin; yet even this, when it was baked, looked as fine and large as the others.

So the old woman put all the cakes on the shelf and offered the stranger a dry crust of bread.

The poor man only looked at her and before she could wink her eye he was gone.

She had done wrong and of course she was unhappy.

“Oh, I wish I were a bird!” said she, “I would fly to him with the largest cake on the shelf.”

As she spoke she felt herself growing smaller and smaller until the wind whisked her up the chimney.

She was no longer an old woman but a bird as she had wished to be. She still wore her black dress and red bonnet. She still seemed to have the large white apron with the big bows behind.

Because from that day she pecked her food from the hard wood of a tree, people named this bird the red-headed wood-pecker.

おかの上に、ひとりのおばあさんがすんでいました。おばあさんほど小さくて、きちんとした人の話は、聞いたことがないでしょう。おばあさんはいつも黒い服を着て、うしろに大きなちょうむすびのある、大きな白いエプロンをしていました。

頭には、見たこともないような、とてもへんてこな小さい赤いずきんをかぶっていました。

話すのは悲しいことですが、このおばあさんは、年をとるにつれて、とても自分かってになっていました。

ひとりでくらしていて、自分のことしか考えないからだと、人々は言いました。

ある朝、おばあさんがおかしをやいていると、つかれて、おなかをすかせた男の人が戸口にやって来ました。

「おくさん」と男の人は言いました。「おかしを一つ、いただけませんか？おなかがぺこぺこなのです。はらうお金はありませんが、そのかわり、あなたがさいしょにねがったことが何でもかなうようにしてあげましょう。」

おばあさんは自分のおかしを見て、人にあげるには大きすぎると思いました。そこで、生地を少しちぎって、オーブンに入れてやきました。

やけてみると、物ごいの人にやるには、きれいなきつね色で、よすぎると思いました。

もっと小さいのをやき、またもっと小さいのをやきましたが、どれもさいしょのと同じくらい、きれいなきつね色になりました。

とうとう、ピンの頭ほどの生地をとってやきましたが、それでもやき上がると、ほかのと同じくらいりっぱで大きく見えました。

そこでおばあさんは、おかしを全部たなにしまって、見知らぬ男の人には、かわいたパンのかけらをさし出しました。

かわいそうな男の人はおばあさんを見つめただけで、おばあさんがまばたきする間もなく、すがたを消してしまいました。

わるいことをしたので、もちろん、おばあさんは悲しくなりました。

「ああ、鳥になれたらいいのに！」とおばあさんは言いました。「たなの上のいちばん大きなおかしを持って、あの人のところへとんでいくのに。」

そう言ったとたん、おばあさんは体がどんどん小さくなるのを感じ、とうとう風にさっと、えんとつの上までふき上げられてしまいました。

おばあさんはもう、おばあさんではなく、ねがったとおり一羽の鳥になっていました。あいかわらず、黒い服を着て、赤いずきんをかぶっていました。うしろに大きなちょうむすびのある、大きな白いエプロンも、まだつけているようでした。

その日から、この鳥は木のかたいみきをつついて食べ物をとるようになったので、人々はこの鳥を、アカガシラキツツキとよびました。

たんご と クイズ　アカガシラキツツキ

apron エプロン	**bonnet** ずきん（ボンネット）	**cakes** おかし（ケーキ）
oven オーブン	**shelf** たな	**chimney** えんとつ
wood-pecker キツツキ		

Q1 おばあさんは、男の人に何をあげた？

① いちばん大きなおかし　② かわいたパンのかけら　③ 何もあげなかった

Q2 鳥になったおばあさんが、まだつけているように見えたものは？

① 大きな白いエプロン　② 青いドレス　③ 金のかんむり

Q3 この鳥がキツツキとよばれたのはなぜ？

① 赤い頭だから　② よく歌うから　③ 木のかたいみきをつついて食べ物をとるから

こたえ

Q1 ②　おかしをおしんで全部たなにしまい、かわいたパンのかけらをさし出しました。

Q2 ①　鳥になったおばあさんは、うしろに大きなちょうむすびのある、白いエプロンをまだつけているように見えました。

Q3 ③　木のかたいみきをつついて食べ物をとるようになったので、キツツキ（木をつつく鳥）とよばれたのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。